Vol．６７－No．02　　2015 年 5 月

阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

４月例会（４月 26 日開催）報告

使徒言行録の学び（第 21 回）　　大村　栄　牧師
―新約聖書　使徒言行録　21 章―

日ごとに緑が深まるこの頃ですが、会員の皆様は如何お過ごしでしょうか？
今月号の会報では、５月末に阿佐ヶ谷教会を去られる大村栄主任牧師による信友会例会での最後の聖書講解を特集としました。12 年余にわたる栄先生の阿佐ヶ谷教会での貴重なお働きに感謝すると共に、しばらくの休養の後、少しでも早く体調を回復され、牧者としての道を再び歩まれる事を信友会会員一同お祈りしております。
４月例会の最後では、急逝された江口三雄兄の愛唱讃美歌の一つ（聖なるかな…）を天国の江口兄に届くように、静かに心をこめて歌いました。　　（ＹＨ記）

「聖霊行伝をたどる―使徒言行録の学び―」第21章　　大村　栄牧師

神の必然

パウロの第３回の伝道旅行は突然始まります。第１８章２２節で第２回伝道旅行の報告をエルサレムで終えてアンティオキアに戻り、しばらくここで過ごした後、２３節からまた旅に出てガラテアやフリギアの地方を巡り全ての弟子たちを力づけます。席を温める暇もない出発です。パウロの伝道旅行の目的は、アジア州やヨーロッパでみずから創った教会の育成と共に、長年の飢饉などで疲弊したエルサレム教会の援助のための募金活動でもありました。エフェソでは２年間滞在し、教会の形成の努力を行いましたが、パウロの福音に反対するユダヤ人、アルテミス神などの強大な異教社会の中で問題がありながらもエフェソ教会を励まし育てています。そしてパウロはマケドニア州、アカイア州を通ってエルサレムに行くことを決断したとき、１９章２１節で、「エルサレムに行った後ローマも見なくてはならない」と言います。英語では、「I must also see Rome」で must と表現しています。これはパウロの個人的願望をこえて「神の必然」であると言えます。

信友会は使徒言行録の学びを「聖霊行伝」と言っていますが、聖霊が神の力であり、使徒たちを突き動かす力です。「ローマを見る」は神がそうせよと命じているのです。ローマは当時の世界の中心都市ですのでそこでの伝道を思い描いいたでしょう。ルカによる福音書第９章２２節に「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」とあります。この、「なっている」も must、同じギリシャ語の「デイ」です。復活への神さまの強い意志を感じます。

第２１章では、コリントに３か月滞在している間に、「ローマの信徒への手紙」を書いています。そのローマの信徒への手紙第１章１０節で、「何とかしていつか神の御心によってあなた方のところへ行ける機会があるように願っています」と言い、１５章２２節からの「ローマ訪問の計画」（小見出し）では、２８節で「エルサレムへの募金の成果を確実に手渡した後にあなた方のところを経てイスパニアに行きます」と言います。パウロの願望はローマを経てイスパニアまでも見据えていたのです。当時のイスパニアは文化、学問でも優れた土地であり、大哲学者セネカを輩出しており、ここでの福音伝道を強く思い描いていたのです。

エルサレムへの旅

第２０章の最後のエフェソの長老への惜別の説教では、パウロが行こうとするエルサレムでは、２２節から「そこでどんなことがこの身に起こるか何もわかりません。ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けていることだけ

は聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。」と言います。それでもパウロは神の意志に従い敢えてエルサレムに行きます。エフェソでの惜別の説教の後、長老たちは見送りに来てパウロがもう二度と顔を見せることがないと言ったので非常に悲しみ共に祈って見送るしかありませんでした。

第２１章に入り、パウロたちはミレトスを出港し、コス島、ロドス島を経てパタラでフェニキア行きの船に乗り換え、シリア州のティルスに上陸します。ここから「わたしたち」と書かれていますが、この中には募金を持参した有力教会の代表と共に使徒言行録の作者ルカも含まれています。ルカはパウロに同行してローマまで行きます。ティルスでも弟子たちを探し出して７日間滞在します。彼らも霊に動かされてパウロを引き留めましたが決意は固く信徒や家族が見送る中船出します。そしてプトレマイオスを経てカイサリアに着き、フィリポの家に泊まります。このフィリポは第６章で霊と知恵に満ちたヘレニストのユダヤ人として選ばれた七人の者たちの一人です。彼らは代表のステファノが殉教した後の大迫害から逃れてユダヤ、サマリア方面に散って行きます。フィリポはガザの近郊で福音を述べ伝え、また、エチオピアの高官で女王カンダケの財産を管理する宦官に福音を述べ伝えています。福音がますます異教世界に拡散していった先駆けの福音宣教者です。

この家に滞在しているとき、ユダヤからアガポという預言をする人が来て、パウロが自分の帯で縛られて異邦人に渡されると言います。これを聞いて信徒たちはパウロにエルサレムに行かないように泣いて懇願しました。しかしパウロは、「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえもわたしは覚悟しているのです。」と言います。パウロの覚悟を知り、人々は「主の御心が行われますように」と言い口をつぐみます。そして祈って送り出しました。

パウロ、ヤコブを訪問する

パウロたちはエルサレムに上り、昔からの弟子であったムナソンの家に泊まります。 パウロがエルサレムに着くと兄弟たちは喜んで迎え入れます。翌日パウロはヤコブを訪問します。ここにはエルサレムの長老たちも集まっていました。ヤコブは「キリストの弟」で保守的な人物で、第１５章のエルサレム使徒会議以前からペトロに代わってエルサレム教会の代表になり、エルサレム使徒会議を主導して「ユダヤ人伝道と異邦人伝道の棲み分け」をした人物です。パウロは、自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを詳しく説明し、これを聞いた人々は皆神を賛美しました。

しかし、ヤコブはパウロに待ったをかけます。「兄弟よ、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています。この人たちがあなたについて聞いているところによると、あなたは異邦人の中にいる全ユダヤ人に対して『子供に割礼を施すな、慣習に従うな』と言ってモーセから離れるよう教えているとのことです」。アジア州等でパウロを繰り返し妨害してきたユダヤ人たちからの報告を聞いていたのでしょう。また、この時のエルサレムは、ユダヤ人などの締め付けが強くなり律法遵守などユダヤ教的信仰に逆戻りしそうな状況の中で、パウロの宣教によりエルサレムが異邦人に乗っ取られるとの脅威を持っていたと思われます。そこでヤコブは、パウロがエルサレムに戻っていることが知れ渡れば騒動が起こると考え、妙案として４人の誓願者と一緒に身を清め、頭を剃る費用を出すことを提案します。そうすればパウロに対する根も葉もない噂が解けて、パウロが律法を守る人だと分かるという提案でした。「願い事のために髪を切らない」というのはナジル人の誓願で、願い事が成就したとき髪を切り、頭を剃るのです。士師記でサムソンは無敵の勇者でしたがデリラに騙されて髪を切られ力を失った記事を思い出します。

ここでヤコブは、エルサレム使徒会議で、異邦人伝道のために決められ手紙で通達した禁止事項、「偶像に献げた肉と血と、絞め殺した肉を口にしないこと、また、淫らな行いを避けること」を繰り返し確認しています。パウロはユダヤ人の習慣を守ることを大事にする人であったので、４人を連れて清めの式を終えて境内に入り、清めの期間（７日）が終わり供え物をできる時を聞きます。

パウロ　神殿で逮捕される

２７節から７日の期間が終わり、パウロが神殿にいる時にアジア州から来たユダヤ人たちに見つかります。彼らはパウロの異邦人伝道のなかで妨害を繰り返してきた者たちです。彼らは群衆を扇動して、「この男は民と律法とこの場所を無視することを、至るところで誰にでも教えている。その上ギリシャ人（異邦人）を境内に連れ込んでこの聖なる場所を汚してしまった」と言いました。それで、都全体は大騒ぎになり、民衆は駆け寄ってきてパウロを捕らえて境内から引きずり出し、殺そうとしました。都全体が混乱状態になっているのをローマ軍守備大隊の千人隊長が聞きつけて、直ちに兵士と百人隊長を引き連れて駆けつけると、群衆はパウロを殴るのをやめます。千人隊長はパウロを捕らえて二本の鎖で縛り、パウロが何者で何をしたのかを尋ねますが、群衆が騒ぎ立て真相を掴めなかったので兵営に連行します。群衆はパウロを殺せと叫びながら着いて来ます。

次回の第２２章からは、兵営に行く途中で、パウロは千人隊長の許可を受けて群衆に向かって自身のプロフィール、ダマスコ途上での回心、異邦人への福音などついての弁明を始めます。

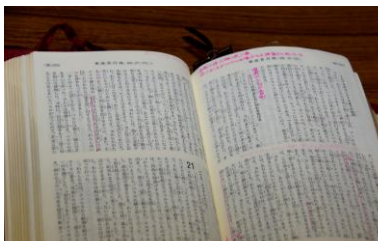
その後の使徒言行録の俯瞰･ローマを経てイスパニアまで

これからパウロのローマへの護送に向かう物語が始まりますが、第２２章以降の使徒言行録の経過を話して終わりにします。

パウロはローマの市民権を持っているので、ローマの法で裁かれなければなりません。２３章では、ユダヤの最高法院にかけてパウロの罪を吟味しようとしますが埒があきません。また、パウロ暗殺の陰謀があるので、千人隊長は総督のいるカエサリアに護送します。そして、総督フェリックス、後任の総督フェストスへの弁明、皇帝への上訴、ユダヤの王アグリッパへの弁明も行います。

第２３章１１節では、「主はパウロのそばに立って、勇気を出せ、エルサレムで私のことを力強く証ししたように、ローマでも証ししなければならない。」と言って力づけます。２年間経ったが、ユダヤ最高法院もローマ総督もパウロに罪の証拠を見出すことができません。ただ、皇帝への上訴があったためローマに護送されます。その旅程でも暴風、難破などの困難がありながらローマに到着します。ローマでは多くの信者に歓迎され、自由に宣教しました。第２８章３０節では、「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」と書かれています。

パウロは、念願のイスパニアへ福音伝道は出来たでのしょうか。伝承では、ローマ皇帝ネロによるキリスト教大迫害に巻き込まれて殉教し、イスパニア伝道の夢は適わなかったと思われます。

しかし、その後の多くのクリスチャンの熱い伝道によりイスパニアはキリスト教国になり、イスラムの占領という困難を乗り越え（リコンキスタ）ます。そして、宗教改革の時代に、スペインの宣教師でイエズス会のフランシスコ・ザビエルが１５４９年に日本伝道の第一歩を記しました。これが日本のキリスト教伝道の先駆けになったのです。教会の歴史は神の必然であり、パウロの思いを引き継いだ多くの人々により成就されます。私たちもそれぞれの役割を引き受け教会の歴史の一部を担う思いを持って信仰生活を続けたいものです。

（文責：玉澤武之）